

東方史の構造と展開

田村 實 造

東方史といふ、あまりききなれないなまへを使つたのでこれについて少し説明を加へることをゆるしていただきたい。

これまでわが國で、ふつうによばれてきた東洋史といふのは、中國を中心とする歴史、いひかへれば、中國の政治や文化の發展史であるが、東洋といふことばが、西洋に對するものであるとすれば、東洋史はひろく西南アジア、インドなどもふくめた、アジア史とその範疇をひとしくすべきであらう。かように、アジア史としての東洋史となると、すくなくとも、それは二つの歴史的の世界にわかつて考へるのが便宜であるように思はれる。すなはち、西南アジアおよびインドをふくむイラン・アリア世界としての西

方史と、中國およびその北方地域のモンゴル、マンシウをふくむシナ・モンゴル世界としての東方史とである。そしてインド・シナ、マライ、ジャワなどの、いはゆる南海地方と、トルキスタンの名でよばれる西域地方とは西方史的世界と、東方史的世界との交錯するところと考へられよう。

わたくしのいふ東方史とは、かようないみで、アジア史のうちにおける西方史に對する東方史をさすのであるから考へかたによつては、いはゆる狹義の東洋史と、ほぼ同じ範圍といひうるかも知れない。しかし、範圍はだいたい同じとしても、これまでわれわれが、よびなれた東洋史は、その構成上からみると、まづたく中國史であり、中國の政

治・文化圏の歴史にほかならない。漢民族と相拮抗して、東方史發展の上に大きな役割をもつ、トルコ族、モンゴル族、ツングウス族などの北方民族については、北狄とか塞外種族とかいはれて、ただかれらが漢民族と關係交渉をもつかぎりにおいてのみ、そのときどきに記述されてゐるにすぎず、まづたく中國史の一部として從屬せしめられ、附隨せしめられてゐるようなありさまである。これは正しいいみでの東洋史ないしは東方史としてみなしうるのであらうか。もちろんこのことは、北方民族にほとんど、かれらみづからの言語や思想によつて書かれた独自の文獻がなく、史料的に獨立性を缺如してゐるといふ理由にもよるであらうが——もつとも北族として中國に入つて國をおこした北魏や遼・金・元・清の諸朝は、その建國後、漢民族によつてたてられた諸王朝と同じやうに漢文の實録や國史をもつてはゐるが——しかし中國の史料以外に、獨立した自らの史料を有しないからといつて、歴史的世界を構成しえないものであらうか。南方の漢族的世界に對する北族的世界の成立を可能ならしめえないであらうか。

もつとも、かつて白鳥庫吉博士は、箭内互博士の遺著蒙古史研究の序文において、東洋史上における南北兩民族の二元的關係を説いて、南方の文化國家中國と、北方の遊牧民族との對抗は、アジアの歴史をつらぬく綱領であることとを道破され、のちさらに史學會編、東西交渉史論中に收めた「東西交渉史上より觀たる遊牧民族」なる論文のうちに「も、だいたい同じやうな考へを、より詳しくのべられてをり、また宮崎市定博士も、その著「東洋における素朴主義の民族と文明主義の社會」において、華夷兩民族の對立に立場をおきつつ東洋史——東方史の發展を概説し、これまでの漢民族中心主義に對して、南北兩民族の二元的關係を強調されたが、しかしそれらは、いづれも北方民族の漢民族に對する關係を歴史的に敘述されたもので、いまだ北方民族の歴史的世界の成立といふ點については考察がむけられてゐないやうに思はれる。北方民族の一部が漢民族と交渉をもつたとか、あるひは中原國家に侵入したとかのみをもつては、東方史の構成を充分に説明しえたものとは、いひがたいであらう。わたくしの問題としようとするのは、

まづ、この南北二元的關係の前提條件たる北方世界成立の可能性、いひかへれば、中華的世界のうちにおいて考へられる中國と北方、それはやがて中國文化に光被せしめられるべき命運にある夷狄といふ、いはゆる中華的歴史觀のかせからはなれて、獨立した民族的世界の歴史的構造を考へること、これが一つ。つぎにまた、北方世界の成立が可能であるとすれば、その南北兩世界は、歴史發展上いかなる相關關係をもつのか、逆にいへば、南北兩世界の有機的連關性の上に、東方史の生成發展のすがたを概観することこの二つにある。

まづ北方世界の成立を可能ならしめるかに考へられる諸條件をみてみるとおよそつぎのやうな點があげられよう。

1 東方史上、漢民族に對立して偉大な役割を演じてゐるトルコ、モンゴル、ツングウスら諸族が興起活躍した舞臺は、モンゴル高原を中心とする——ひろくいへば、東はマンシウ、北はシベリア、西は中央アジアにおよぶが——の地域的單一體をなし、これは中國本土とは、別個の地

理的の世界を構成してゐる。

2 古來この地理的世界を活動範圍とした諸民族は、いづれもその生活の基調を遊牧あるひは狩獵またときに一部は副業的な農耕においてをり、したがつてかれらの生産様式や生活文化、風俗習慣などは南方漢民族の農耕にもとづく生産、文化、風習、思想形態とは本質的にちがつてゐる。

3 北方民族を漢籍史料の上からみると、キョウド(匈奴)、センビ(鮮卑)、ジュゼン(柔然)、トルコ(突厥)、ウイグル(回鶻)、キタイ(契丹)、ジュルチン(女眞)、モンゴル(蒙古)、マンシウ(滿洲)などと多くの異民族が、かんげつ的に興起降替してゐるかのようであるが、これは、それぞれ遊牧國家を構成する上に主體となつた部族のなまへであつて、よりひろくみてゆくと、それらを構成する民族の要素は、多くのばあい、同じ遊牧狩獵民たるモンゴル族トルコ族、ツングウス族ないしはチベット系のクングウト族などの諸族にかぎられてゐる。たとへば、デンギス・カアン(チンギス・カンの)のモンゴル帝國についてみても、この國はモンゴル族中の一氏族を中核に勃興して、しだいに全モンゴル族を統

合したのち、さらにこれが盟主となつて、トルコ、ツング
ウスあるひはタングウトなどの諸族を結合吸収して、一種
の部族連合體的國家を構成するにいたつたもので、しぜん
それは、遊牧的征服國家ともいふべく、絶對權力による支
配が、その基本的性格をなしてゐる。元代皇帝の聖旨や勅
書のはじめに、きまつたように、とこ世の天つ神の氣力に
おいて（長生天氣方裏）などの一語がみえるのも、そのあら
はれにほかならないと思ふ。このような傾向は、モンゴル
帝國にさきだつキョウド、トルコ、ウイグルなどの諸帝國
においても、ほぼ同様であり、いはゆる盟主としての部族
は、そのときどきに代つても、北族的國家を構成する民族
要素は、つねに前記の數個の同一部族にして、これらの部
族が、政治的にまた社會的に複合し結合してゆく過程のう
ちに、北方の歴史の連続性がみとめられるであらう。

4 北族國家の支配の原則が絶對權力であるため、君長
は神性的權威をもつが、かれは有能・勇氣・公平の資質を
具有することを必須の要件として——たとへば鮮卑遊牧帝
國を興した檀石槐は、勇敢にして智略に富み、かつ裁判が

公平であつたため、諸部から推されて君長となつたといひ
あるひは烏桓族では勇健にして鬪訟を公平に決裁するもの
が大人に推載されるといふ（後漢書烏桓鮮卑傳）。清朝の太
祖ヌルハチは、勇氣および智力にすぐれてゐたことはもと
よりであるが、さらにかれがよく衆望をえたのは、戰鬪や
狩獵に際して、そのえものの分配にすこぶる公平であつた
點にあるといはれる——いはゆるクリルタイ（集會）とい
ふ北方独自の民主的形式によつて推戴される。そして、こ
の指導者の統制のもとに全種族が大同團結をする。したが
つて遊牧國家は、急速にその領域を擴大してゆくが、指導
者個人につながる結合であるため、その組織は強じん性を
かぎ、一たび指導者を失ひ力の根源がつきると、たちまち
にして部族連合體は瓦解分裂する。しかし、あとからあと
からと、つぎつぎに同じような部族の大同團結が行はれて
ゆく、あたかも南方漢族世界における王朝の迭立のやう
に。

だいたい以上のように考へると、われわれは北方モンゴ
ル高原を中心とし、さらにひろく東はマンシウ、北はシベ

リア、西は中央アジアを外延とする地域に、一個の歴史的世界が成立する可能性をみとめうるであらう。しかしして、

この北方世界に歴史的發展性を附與するものは、かれらが南方漢族世界と對立し、政治的にも社會的・經濟的にも、はたまた文化的にも接觸、連關を有するといふことである。北方世界がこの南方世界と遊離してあることでなく、鬪争的遊牧騎馬族たる前者が、平和的文化的農耕族たる後者に對し、侵略にせよ、友好關係にせよ、はたらきかけてゆくところに、北方世界の歴史的發展性がみだされる。

したがつて、この意味において東方史は、南方中國的農耕世界——中國本土のみでなく朝鮮・日本あるひは安南をもふくむ——と北方遊牧世界との兩世界から構成されてをり、この對立する兩世界を綜合的立場において考察するとき、完全な體としての東方史が成立するものではなからうか。

さて、北方世界がそれ自身地理的世界から歴史的世界として生成發展するにいたつたのは、紀元前二〇九年頃に父

を弑して立つた冒頓（ボクトツ）單于による匈奴遊牧帝國の建設以來のことであつて、これは中國史の方からいへばあたかも秦から漢への交迭期にあたる。それゆえ東方史は漢と匈奴との二帝國の對立よりはじまるわけであり、それ以前は中國史の範圍に屬し、漢民族中心の、いはゆる中華的世界觀の時代といひうる。つまりそれまでの中國、漢民族は、なんらの地域的被限定性をもたず、したがつて自己が特殊的世界であるとの自覺をも有せず、ただ單に普遍としての自己、無差別に擴充してゆく自身しか意識してゐなかつたのである。かかる中華的世界、觀念上の世界が自己限定をなしはじめる第一歩は、秦の始皇帝の統一であり、秦をうけた漢になつて、あたかも北方にも匈奴帝國が出現し、遂に南北の歴史的世界が成立したものと考へられる。

この南北兩世界の相關的ありかた——友好和平關係にしろ、あるひは侵略鬪争關係にしろ——が、そのまま東方史の展開となる。そこで、かかる立場から東方史を歴史的にあとづけてみると、だいたい三つの時期にわかちうる。

第一期は、紀元前三世紀末より紀元後九世紀にいたる約

一千有餘年間にして、すなはち漢・匈奴兩帝國の出現にはじまり、やがて南北朝をへて隋および唐になると、北方世界に對する中國側の政治外交上よりする壓迫と文化の浸透が行はれた時期である。そしてこの間における歴史的现象を要約してみると、つぎのやうなことがいはれるであらう。

兩世界が和平友好の關係にあるときは、羈縻（キビ）と朝貢とが、相互の間にくりかへされてゐる。

キビとは、中華的世界より北方世界に、はたらきかける一つの政治的形式にして、すなはち北族首長の麾下諸部族に對する統治權は、そのまま許容して、中原國家の宗主權をみとめさすことである。具體的にいふならば、（イ）北族が中國の宗主權に服して使節をつかはし進貢すること。

（ロ）中國側は、その代り北族首長の麾下諸部族に對する行政權や徵稅權をそのまま容認する。（ハ）そしてかれら首長はじめ貴族らに對し、中國風の官爵を授與したり、あるひは公主を降嫁せしめる。などのことがあげられよう。それゆえ、もし中國側にキビしうる力——武力・權威・權

力あるひは經濟力などの總和としての力がともなはなければ、ほんとうにキビの實をあげることはできないわけである。一方、これを北族側からみれば、かれらが中原國家よりキビされたからとて、別に中國側に對して納稅の義務を負ふ必要もなく、かへつて公主を降嫁されたり、官爵をさづけられることによつて、精神的には麾下諸部族に對し、みづからの威信を誇示しえ、首長や貴族としての地位を強化しうることもなる。そのみならず、進貢に對する返禮として、中國側から與へられる賜與品による物質上の利得は、さらに大いなるものがある。

朝貢とは、キビ關係を前提として、その上に成立する經濟的・外交的形式にしてすなはち北族は、宗主國たる中原國家に對し、それぞれ毛皮・馬・牛・羊・駱駝などの土産を貢物として進獻するのであるが、その貢物に對し、中國としては、金・銀・錢幣のほかに、米・麥・粟などの食糧品や絹・帛・綿の織物衣服の類にいたる、およそかれらの欲する莫大な諸物資が賜與される。これは北方族にとつては、もつとも有利な交易であり、合法的物資のかくたくで

あるが、これを中國側よりみれば、その豊かな經濟力にも
のをいはせる略利懷柔政策ともいひうる。したがつて、キ
ビと朝貢とは一體不可分の關係にたつものであり、これら
はいはば天の選民たるの自覺にもとづく中華思想漢民族的
倫理性の具體化したもの、すなはち華の夷に對する支配の
形式にほかならない。

また兩世界が圓錐的關係にあるときは、北方族はたえず
南方の豊饒な農耕地帯に對し、恣意的な物資畜牧の掠奪、
あるひはかれらの牧場に使役し、または特殊な生産に従事
せしむべき奴隸としての男女の劫掠をくりかへす。他方、
中國側はこの侵略に對して、まれには漢の武帝や、唐の太
宗・高宗などにみるやうに、積極的態度にでて武力討伐を
加へることはあるが、多くは常に防禦的立場をとり、この
ばあいにもキビ的懷柔策が構じられる。

以上のことを、さらに總括的にいふなれば、北方世界か
ら南方世界に向つて作用しやうとする經濟的欲求力、すな
はち豊饒な中國本土の物資をかくとくし、人畜を劫掠し、
さらにすすんでは土地・人民をも領有しやうとする北方の

武力的意志力と、他方南方世界より北方世界に向つて、は
たらきかけやうとする政治的文化的支配力、すなはち北方
の諸部族を、自己の政治圏内にとり入れて、これをキビし
支配してゆかうとする南方の意志的な力——この力は北方
の武力いつてんばりなのに比して、權力・權威・經濟・文
化および外交術策など武力・威力・富力・智力を複合した
力であるが——との二つの原動力が、運命的に強く相互に
交流作用をしてゐるものと考へられよう。

第二期は十世紀初頭より十四世紀中頃にいたる約四五
百年間にして、すなはち宋・遼・金・元の時代である。この
間における歴史的現象をみると、北方諸民族がさきの隋・
唐文化浸透の影響をうけた結果、しだいに民族的自覺をよ
びおこし、それが思想的にも政治的・經濟的・社會的にも
現實化して、その得意とする武力をバツクに南方世界を併
呑し統合してゐる。かく第一期において二元的對立の状態
——といふよりかはキビと朝貢といふ中華的支配政策のわ
く内から脱して、南北兩世界を武力的政治的に統一しや
うとする北方民族の運動こそ、この期の歴史的思潮をなす

ものである。これはすくなくとも、遊牧國家を揚棄して、より高次の東方史的世界國家へ發展せんとする運動型態であるが、この劃期的現象の先鞭をつけたのはキタイ族によつておこされた遼朝である。

まづ遼國の國家組織についてみると、前期における北方世界の諸國家が、部族的國家を形成するにすぎなかつたのにくらべ、比較的鞏固な中國の國家體制をととのへ、君主の地位もクリルタイ的民主制から、しだいに父子繼承する世襲制となり、專制化するにいたつた。そして、この國の領域は内・外蒙古より滿洲全土にわたるほか、俗に燕薊雲代とよばれる、いはゆる十六州、だいたい今の北京・天津大同の南方をつらねる華北の地を中原國家より割取したがそれ以後つづいて北方に建國した女眞族の金朝は淮河にまでおよぶ華北の全域を、さらにモンゴル族の元朝は遂に全中國を領有してゐる。そのことは、かれらの南方國家との抗争の目標が、以前のやうな、時により所にしたがふ如き恣意的なものとは異り、南方世界の土地・人民を支配しやうとする一定の方向をもつにいたつたことを示すものであ

る。いひかへれば、かれらの南方世界への侵寇の重點は、つねに土地の領有、國土の擴張におかれてゐるが、これはとりもなほさず北方民族の土地または國土に對する觀念が根本的に改變されてきたものと考へられ、かれらの經濟的智識の一大進歩とみなされねばならぬであらう。經濟的智識の進歩といへば、遼國はただに華北における一部土地人民の領有のみにとどまらない。しばしば南方深く侵入しては、おびただしい民人を劫掠し、それらを集團的に領内各地に移植して農耕に従事せしめ、主として遼國の國家經濟をまかなはしめてゐることも、前期と異なる現象といへよう。

かくて國內に農耕定着の民が増加してくると、かれらは遼國の本族たるキタイ族や、これに准ずる遊牧部族とは一切の生活様式を異にするため、とうてい一元的に考へられない二つの被治者層が成立し、そのため統治の型態も、北南二面制といふ二元的行政組織が案出施行されるにいたつた。北・南二面の官制とは、キタイ族をはじめとする北方族には、本來の風習をもつてする部族制（遊牧民體制）を

また漢人を中心とする農耕民には、在來の制度による州縣制（農耕民的體制）を設けて統治するの方針をいふものであるが、かような二元制は、政治組織の上のみでなく、服飾・儀禮などの類にまでもうかがはれ、たとへば朝廷にあつては、皇帝および南面の漢人官吏は漢服を着用するが、皇后（または太后）と北面の北族官僚とは國服（キタイ服）を用いるのが常であつた。この多元的な統治型態は、ひとり遼國のみにかぎらない。多少の相違はみとめられるが、その後の金や元においてもその精神はうけつがれてゐる。

そのほか、南方世界から農耕民を大規模に、集團的に國內に徙民するにつれて、北方の各地にあまたの都市城邑が成立發達して、文物の普及や社會・經濟の進展の上に、重要な役割を演じてゐることも、また顯著な現象としてあげられる。

さらに特筆に値することは、契丹文字の創製である。契丹文字には、はじめ大字と小字との二種があつたが、そのうち大字はすたれて、もつばら小字のみが用ひられてゐる。この小字は原理を西方に起源するウイグル語にとり、

また字形を漢字に模してつくられたものである。がならい言語といひ、文字といひ、もつともよく民族精神の消長を具現するものとすれば、かように独自の文字を作成して、みづからの思想を表現せんとしたことは、たんなる漢文化の模倣ではなくして、そこにはあきらかに民族的自覺がみとめえられる。もちろん、これまた以前北方に出現したトルコ（突厥）・ウイグル（四鵠）なども、それぞれ文字を有してゐたことは、今日よく知られてゐるが、それらは、いづれも漢文・漢字とはなんらの關係もなく、契丹文字のやうに、漢字の形をとりいれつつも、これとは異なる独自の文字を創製するうらには、自覺にもとづく對抗的意識を豫想せざるをえない。かくて、あらたな國字製作の風は、近隣の諸國諸民族に大きな影響をおよぼし、やがてその西隣に建國したタングウト族の西夏國では西夏文字が、ついで金朝では女真文字が、元朝ではパспа文字などの諸文字が相ついでつくりだされてゐる。

なほまた思想上からは、このほかに國史書の編纂がありこれはその後、金・元・清と北方族に出自する王朝によつ

て、しだいに大規模に行はれるにいたつたが、いま遼國のそれを述べることによつて、金・元などの説明をもちかへることとしよう。遼國においては、統和九年（九九一年）聖宗は寧昉らに命じて、はじめて實錄を編纂せしめたといはれるが、このことは、かれらがやうやく民族としての自己にめざめはじめ、みづからを意識しようとする努力を示すものにはかならない。したがつて、キタイ族の眞の國家的統一は、まさにこの時にはじまるとも考へえられるであらう。

以上、略述したところからみると、それらのことは、たとへ漢人の智識や文物制度を採用し參酌したにしても、漢文化に化せしめられないで、よく獨自の立場を創造し保持したものとしよう。そして、かような趨勢は、遼朝をうけた金朝および元朝にいたつてもつづけられるが、このこととはいはば、南方世界に對して北方世界の對等性または優越性を主張するものである。事實、第二期に入ると南の北に對する宗主國と朝貢國といふようなキビ的關係は完全に解消されて、かへつて、遼國は北宋に對して、國際的に見

弟の關係をむすび、金國は南宋に對して、君臣ないしは叔姪・伯姪の關係を強要してゐるありさまである。朝貢にしても逆に南方の宋國から遼や金へおくる贈物を歲幣といはれ、この歲幣による利得のほか、別に相互の合意による陸上貿易場——權場とよばれてゐるが——が、兩國國境の各所に設けられ、そこで正常な商取引が行はれた。これは注目すべきことで、さきにもいつたやうに、中國は古來朝貢は、ギヒ國に對して恩惠的にゆるしたもので、賜與こそすれ、これによつて自己の利益をえようなどは、まつたく考へてゐずこの點近代諸國家の植民地や屬領に對する關係とは大いに異なるが、宋代以後、すなはちここにいふ第二期においては、他民族國家に對し、政府みづから正式な貿易を行ひ——とくに南海諸國に對しては市舶司を設け、輸入品に高率の税金を課してゐる——それによつて國庫の充實を、はからんとしてゐる。この點、朝貢貿易とは本質的に異なるものがあり、近代の國際貿易に類似する性格をおびてゐる。

ひるがへつて、北方民族の南方世界に對する統合運動を

漢民族側よりみると、これまで自負してきた中華的優越感
は、北方の武力的壓倒にあつて攘夷思想に變質し、やがて
それは漢民族意識の昂揚となつた。そして、反面かへつて
南方世界の社會的・民族的な再生を招來し、それによつて
あらたな世代へ飛躍すべき素地をもきづき上げてゐる。ま
た文化の面においても、北族支配の下にあつて新文化展開
への準備ができあがつてゐることがうかがはれる。

要するに、第二期にあつては第一期の末頃から隋・唐文
化の波及によつて民族的自覺をよびさまざまな北方世界の諸
民族が、その現状を超克すべく全精力をつくしてみづから
をエネルギーに中國本土にぶちつけ、部族をあげて入
りこみ、その得意とする武力をバックとする強力な政治力
によつて、南北兩世界の統一をはからうと努力したもので
ある。さきにのべた、かれらの統治型態の多元制も、けつ
きよく兩世界を政治的に一元化しようとする努力より生れ
たものにほかならないであらう。

第三期は十四世紀以後二十世紀初頭にいたる約五百五十
年間にして、すなはち明代より清末にいたるまでの時期に

相當する。

この期にあつては、はじめ明の太祖が、元朝を北方に驅
逐して、その南北兩世界統合の體制を打破し、ふたたび漢
民族による中華的世界と、モンゴル族による遊牧的世界と
を對立せしめたが、さきに一言した北族の經濟的欲求にも
とづく南方世界への侵略意力と、反對に北方民族を自己の
政治圏内に包含して、かれらをキビシ支配しようとする中
國僑の政治的文化的意力との交互作用が、この明代におけ
るほど典型的にあらはれてゐる時代はないであらう。すな
はち洪武から永樂をへて宣徳の頃までは、明の政治的支配
力が北方を制壓してをり、つぎの正統から嘉靖の中頃くら
ひまでは、北方の經濟的欲求力が明の國力を壓倒してをり
さらに嘉靖のつぎの隆慶・萬曆・天啓とつづく時代は二つ
の意志力が、相調和した時とみられる。なほ、これについ
ては拙稿、明と蒙古との關係についての一面觀（史學雜誌
五二編一二號）を参照していただきたい。

ところが、明末モンゴル族に代つて、東北に滿洲族が興
起し、これがやがて大清帝國として南北兩世界を包攝する

と、元代と同じように、東方世界の政治的一元化が現出することとなつた。しかし、清朝は元朝とは異り、中國文化を自己のうちに攝取消化して、より高次の立場にたつ道義の上から、民族的對立を止揚することにとめてゐる。もつとも、北方族に出自する支配者として、漢民族を懐柔しようとする政策的意圖は、多分にみとめられるにしても、その良心的な政治性は、高く評價してやらねばならない。いまいちいちの事例をあげてをさしひかえるが、とりわけ康熙・雍正・乾隆の三代は、このことにもつとも眞剣な努力を、かたむけた時代である。

いつたい東方史の各時代を通じて、清朝ほど道義政治をまじめに行はんとした王朝は數すくないであらう。かれら滿洲族は、北方の武力と南方の中華的道義精神とを、政治の上になくみに調和せしめんとつめてをり、あたかも中國文化による南北世界の統合が行はれた唐代と、その反對に、北方的武力の下に、南北世界の政治的統合を強行した元代との綜合的立場をとつたのが清朝の政治である。それゆえ、第一期と第二期とを含みつつも、さらにそれを一段

高く展開せしめたのが第三期の清朝の立場であるといへよう。まことに清朝こそは、南方の中華世界と、北方の遊牧世界とをまとめた、一つの東方史的世界の歴史的使命を自主的に負ふもの、すなはち、その支配者としての、はっきりした自覺を有し、それによつて南北兩世界を、綜合の立場より統治せんとしたものと考えられないであらうか。

なほ、最後につけ加へて一言するならば、二十世紀初頭の辛亥革命（一九一一年）より現在にいたる間が、第四期に相當するわけであるが、辛亥革命は、これまで數千百年間中國を支配した儒教的イデオロギイによる君主專制下の封建官僚體制をくつがへして、あらたに三民主義にもとづく共和民主政體を成立せしめたもので、この點古來中國において、いくたびかくりかへされた王朝交迭の諸革命とは全く異なるものである。中國はこの革命によつて、完全に東方史的世界より世界史的國家へと飛躍轉換をとげ、それとともに北方遊牧民族の歴史的役割も、清朝を最後にほぼ終焉をつけ、それに代つた中華民國は、ここに近代の國家への、たくましい歩みをふみだしたのである。そして、この

國は過去八年間にわたるわが日本との戦ひを戦ひとすることによつて、その民族的強じんさを世界に示しえたが、世界戦争終了後の現在は、三たび南京を中心とする國民黨と滿洲・蒙疆および陝甘寧邊區を足場とする中國共產黨との南北兩世界の對立をきたしつゝある。

しかしこの對立は、從來みてきたやうな農耕民族と遊牧民族とか、南方世界と北方世界とかの、民族的ないしは歴史の・地理的差違によるものではなく、一方は三民主義を

威儀

——周代貴族生活の理念とその儒教化——

貝塚茂樹

政治の原理とし、他方は新民主主義を政治理念とするイデオロギイの相違にもとづく南北の抗争である。しかも兩者は、ただちに米英の民主主義的世界と、ソ連の社會共產主義的世界につながるといふ、全世界を背景にする争ひである。かようになつてくると、それはもはや東方史のみの構造の中には包攝しきれないで、同時に世界史の問題であるといへよう。(昭和二十二年九月五日稿了)

(同年十月十七日史學研究會大會講演)

一
威儀といふ言葉は中國古代の史書や儒教の經典のなかで度々使はれてゐる言葉である。これらの文獻を通じて威儀

の意味を考へて見ようとするならば、二つの違つた方向をとることができる。一つは威儀をば一つの孤立した言葉として、専らその言葉の指示してゐる概念の内包を具體的に明かにして見ようとする行き方である。これに對して今一